

# 三浦勲郎教授、第5代学長に



発行所  
日本工業大学  
広報課  
埼玉県南埼玉郡宮代町  
郵便番号 344 5  
電話 04803(4) 4 1 1 1

Clean & Green  
緑化計画進行中  
学内の美化に協力を

## 新春随想



三浦勲郎学長

三浦 勲郎学長

また、卒業生を送り出し、新入生を迎え入れる季節になった。大学にとっては一番慌ただしい、一番の吹き荒れる天気のように落ちつかない時期である。

私は学長を命じられて、もう三月になる。学長代行の期間をいれると、ほぼ一年に近い。大学の現状から離れることは無いが、時間のほうがかかるかに足が早い感じである。

卒業生を送り出すときは、うれしけれども、また寂しい。そして不安である。卒業生たちが卒業を終えて、実社会に出て、よく責任を果たしてくれるだろうか、なにかが無事に動いてもいいだろうか、折るような気持である。卒業して何か月かしてまた学校に元気な顔を見せてくれると、ほっとする。

大学と学生とのつながりは、たとえ卒業しても、切れることはない。一生日本工業大学の卒業生であることに変わりはないからである。

そのつもりで熱心に、元気に動いてもらいたい。またわれわれもますます研究・教育・施設・設備を充実して、誰もが誇りをもちつて口にする事ができるような大学にしたいと思う。

新入生を迎え入れるときは、また新たな緊張を感じる。責任を感じると、一仕事が終わったばかりのときには、もう次の仕事が始まっているのである。

新入生はほとんどすべてが工業高校の出身者である。実社会に出ていく者の多い中で、さらに四年間大学で学び、高度の科学技術者たらんことを望んでいる者たちである。はたしてその期待に応えることができるかと、つねに反省をする。

高校においてすでに工業教育を受けてきた者に対しては、その基礎の上に高度の工業教育を積み重ねなければならない。どのような形であれ、とにかく高校、大学を通じての教育の一貫性がなければならない。

これはならない。これだけは、他の工業大学にはない、われわれだけの課題である。この課題にすでに十数年取り組んで来て、失敗もあれば成果もあつたのであるが、なお最善の努力を積み重ねていきたいと思う。そして日本における工業教育について語る事ができるようになりたいと思う。そのためにも、学園内に東京工業高があることもあり、また他の工業高校とも緊密な連絡をとり、いっしょに研究を進めていきたいと思う。

この考え方を進めていくと、大学の上にもさらに高度の研究機関を設置することが考えられる。大学院まで一貫したとき、はじめて工業教育は完了する。また創立十周年を終ったばかりの大学であり、学部の研究、教育の充実の一層の努力をしなければならぬ段階であるが、そう遠くない将来の目標として、いつも頭に入れておきたい。目標があつてこそ、日々の進歩があるのである。

たしかに、創立十周年を経て、りつぱな大学になってきた。自信をもってそう言える。いまだ後援会の援助によって構内の植樹が進んでいる。この木がみな根づいて、青い芽を吹いてきたとき、大学の景観は一変するであろう。昨年度の本館の改装といひ、また、植樹といひ、いずれも教育環境の整備であるが、いよいよ環境の整備を考へることができるようになったというの、本音である。

また四月からは保健体育センターが発足する。殆ど早々からフル回転を期待するのはむづかしいが、学生と教職員の健康管理についてはまず万全の態勢を整えたい。安心して研究、教育に専念することができるわけである。しかし、研究と教育の諸条件を整えてくると、われわれの目標とした研究と教育そのものに向く、そして、一応充実して、もう他大学にくらべて遜色はないと言った言葉の下から、またまた整備充実しなければならないものを数限りなく見つける。

実験棟は工業大学の生命である。その実験棟がいまのままで十分な実験実施の場になっていないと、言い切ることができなくなるが、第一、草創期に建てられたあの建物には、もう思いきってもっとも立派なものにしたほうがいいのではないだろうか。シラブ活動は、いまでもみな楽しんでやっている。そうならば当然、体育施設の二層の拡充が必要になってくるであろう。スポーツとも、講義を聞き、映画を見、音楽を楽しんで、

また四月からは保健体育センターが発足する。殆ど早々からフル回転を期待するのはむづかしいが、学生と教職員の健康管理についてはまず万全の態勢を整えたい。安心して研究、教育に専念することができるわけである。しかし、研究と教育の諸条件を整えてくると、われわれの目標とした研究と教育そのものに向く、そして、一応充実して、もう他大学にくらべて遜色はないと言った言葉の下から、またまた整備充実しなければならないものを数限りなく見つける。

実験棟は工業大学の生命である。その実験棟がいまのままで十分な実験実施の場になっていないと、言い切ることができなくなるが、第一、草創期に建てられたあの建物には、もう思いきってもっとも立派なものにしたほうがいいのではないだろうか。シラブ活動は、いまでもみな楽しんでやっている。そうならば当然、体育施設の二層の拡充が必要になってくるであろう。スポーツとも、講義を聞き、映画を見、音楽を楽しんで、

## 学内にエネルギー委員会が発足

本学では、昨年十月「エネルギー問題」を多角的に考える学内委員会として、話し合いが進められて、重要課題である。加えて、エネルギー利用に伴う地球規模での環境問題も無視できない問題となつていく。

以上を考慮した上で、本学においてこのエネルギー問題の解決にどのような寄与が可能か、単なる代替エネルギー源の研究ではなくその科学的、工学的さらに経済的効果を厳しく評価した上で貢献を期待すべく、学内各方面からの検討を伴う学内委員会を設置し、それにより方向づけられたるべき次代のエネルギー源に関する基礎研究及び実証研究を遂行し、その研究過程を示す設備等を設けて本学学生に対する示唆に富む教材としての活用を計ると共に、本学のエネルギー問題に対する姿勢を世に問うものとした。

(「エネルギー問題を多角的に考える学内委員会」(略称「エネルギー委員会」)設置趣旨書から)

## 四月からスタター保健体育センター

「日本工業大学保健体育センター」が設置され、新年度から運営される運びとなる。当センターは保健体育に関する教育・研究、学生や教職員の保健・健康管理、学内施設にわたる環境衛生の管理、保健・体育施設や設備の管理などにあたることになる。このため、保

## エネルギーシステム研究の展開

町山忠弘 機械工学科教授

この度「エネルギー委員会」が発足し、近年のエネルギー問題をふまえて、教育研究の有用な企画に関する検討が始まった。

私は研究課題「エネルギー・システムの力学挙動とその制御」のもとに既に、十年に近い研究期間を続けてきた。その中で、昭和五十二年に「太陽熱利用システム」をとりあげ、二十平方メートルの集光型ソーラコレクタを設置し、実験研究に着手した。また、低圧熱エネルギーの動力回収等としての「低圧熱媒体タービンシステム」に関する研究企画を進め、昭和五十二年、学外研究者との協力により「低圧熱媒体タービンシステム」研究会を組織し、出力三十三キロワットのフロンR11タービンおよびその十分の一の熱的損失を適量した。わが国の大学設備として最大規模のものである。さらに、同年に日本放送協会の放送文化基金からの助成を受けた早稲

田山(伊藤)忠弘教授、太田(佐藤)教授、共同のもと、「風力発電システム」に関する研究に着手し、実験用風車と併せて、0.5キロワット出力の風力タービン・発電機の試作を開始した。

以上の段階で、昭和五十二年十二月に、関東甲信越地区の工業高等学校の機械工学科主任各位の視察を仰いだ。

以来、実験研究は順調に進展して、「低圧熱媒体タービンシステム」に関する研究は昭和五十五年までに取組の段階を迎える見通しをえている。概略的に「低圧熱媒体タービンシステム」は水蒸気タービンとその排気熱源とするフロンタービンとによって構成される「バイナリ・タービンシステム」(二媒体タービンシステム)に関する実験研究としての発展企画として、既に準備が完了している。

「風力発電システム」に関する研究は既に試作三号機を完成させ、以上の諸研究についての研究成果は多くの論文や講演によって公表されている。

このような範囲にわたるシステム技術に関する研究を行なうためには種々の条件が備わらなければならない。

一、基本技術(個別的)に関する知見と実践技術をもつこと。  
二、各領域の専門技術者・研究者の協力をえること。  
三、実験研究を行なうための実験設備を整備し、研究に必要な要件である。まず、研究水準で、単一大学が多くの個別領域に専門技術研究者をスタッフとしてそろえることはできない。一つの大学の枠を超えて、他大学とも協力する事が不可欠で、現在学外から二十余名の研究協力者の参加をえている。

種々の相にわたるエネルギーの形態について、基本技術と知見を備えることも容易ではない。実験技術は、とくに一般の公開資料のみに依存して技術実践は果たし難い。昭和五十二年に、「伝

## 研究成果の教育への導入も検討

熱・プロセス工学共同研究実験施設を運営し、最先端企業との協力のもとに、高性能伝熱器に関する開発研究を積極的に進めてきた。このように他から補充しえない技術は自らの研究開発によりねばならない。

エネルギーシステムに関する実験研究を展開するということは、以上に述べた諸要件に加え莫大な費用を要する。到底大学自ら調達できるものではなく、実験研究の有用性を問うて、学外企業との力を仰がねばならない。因みに最近四年間の投入資金は三億円を超えている。

本学は工業高等学校出身の学生がほとんどである。工業高校が主として加工、工作、製図等の専門技術者の養成を目的としているので、必然的にエネルギーや動力といった不可視のものになじまない傾向がある。しかし、今後諸君が大学を巣立って入っていく工業界を展望するとき、従来の学習の枠を超えたいことが望ましい。大学に入学したとき、技能者から技術者へと自分の将来を向上、開拓するために、従来の一度捨て去り、改めて技術を考え、より広い視野に立つて新たな技術観を構築し、各人の技術者像の設計をする事が肝要である。従来の学習による知識域にのみ留まるのでは、大学に入学した意味も多々失われてしまうように思う。

前述の諸研究に、四年の段階で「卒業論文研究」として諸君の先輩は参加し、多くの研究業績をあげ、多くの学習を果たしている。「為すこと」によって、学外の労をいとなければ、驚くほどの学習進展がえられるものであることは先輩諸君の足跡が明示している。エネルギー委員会に呼応して、教育(学習)のしみの改革が企画され、進行している。二十世紀を生きていく技術者を志す諸君は、エネルギー・動力と無縁ではありえない。研究とは学習であることをわきままえ(ともに英語ではスタディという)、近い将来の研究参加を求めた。

# 学科主任教授から卒業生へのメッセージ

## 「始業式」に際して

石崎 敬三 機械工学科主任教授



手紙に載せられ、最後にボス猿までやるよになって一つの文化として固定し例もある。人間の場合、幼児に育まらず、肉体的に成熟してもなお幼児の好奇心を持ち続けていることが、真に人間的なことなのだ。

諸君は制度としての大学課程を終えたが、これから死ぬまで続く。人生学校に入學するのだ。この学校は形がな、出欠も自由だが、誰かあるのだ。具体的にいへば、職場に入った第一日から、全学修験しなかつた多くのことにぶつかると、それを、言われるままにのみにするのではなく、その源にのぼって探究することだ。普通は職務知識、たまたま自動車のセールのために車のことを勉強するのは当然だが、それだけでは売れない。自分と相手の会社の組織、職務権限、事務処理法、職場の人間関係、相手

## 自覚と頑張りを期待する

大久保 勝弘 電気工学科主任教授



た。経済活動も、もちろん今日の規模には及ぶべくもありませんから、産業界は低迷し、工学科の卒業生の就職なども、また、かなり厳しい時期でした。その後のわが国経済が立ち上がった途端、いわゆる高度成長期を、とても予測することなどできませんでした。つまり、ばかばかの輝かしい未来が洋々と開けているといった状態ではなく、むしろやや灰色がかった未来が待ち構えているように思えます。

現在、当時は社会の諸状況は全く変わっていますが、昭和四十八年のオイルショック以来、わが国が直面し、今後また新たに乗りこえなければならぬであろう多くの困難を思えば、君たちの前途は、やはりばかばかの光に包まれていくとは、いえ、むしろその行く手はなかなか険しいものになるだろうと断言しなければなりません。しかも、わが国固有の条件であ

れど、判定は厳しい。怠けたり、無責任たり、失敗しても先生が注意してくれるようなことはなく、暗黙のうち、あの男はだめだ、という評価が定まるだけだ。逆によい評価というのは、難しいがやりがいのある仕事を与えられること、上も下も、社内の人も自分の仕事を助けてくれ、自然に成果が上がることを知られる。

今世界中で日本産物に想われ、た国は、それは鉄鋼や機械工業、特に自動車など我々の先輩が、創り出したことではなく、よい仕事を、優秀な製品と、それを作る職場を創造してくれたお陰で、全く相反する社会組織の米国と中国で、労働者が解雇された、あるいは失業者が充満してたりするのを知ると、そのよき成果が単なる安い労働力や優秀な技術というふうなものではなく、深く人間のあり方、社会での生き方に基づいていられる。この新たに戦列に加わった諸君が清新な意気をもって、さらに後輩や子孫のために、より良い日本を創り出して、くれることを期待する。

## 環境と開発

三苦 正光 建築学科主任教授



建築は環境を開発し、新たな環境を創る。永く親しまれた環境が人々の愛をうけつつ失われ、やがて別の環境が周囲に足場の陰から立ち現れる。美しい自然や懐かしい建物の家並みが、開発のために記憶の中にのみ生きる運命となるのを、私たちはいくつもの事実によって知っている。

開発については、建築学科の教育と研究が、これに触れないものはない。そして開発のためのテクノロジには法律が伴うと考える。学生諸君が本学を卒業後、社会で活躍する時、それがわが日本の土地においてあると、北の技術

## 改善は永遠にして無限

横内 龍雄 システム工学科教授



卒業おめでとうございます。八十年代のきびしい省エネ時代に社会が振り回っていく諸君に、私の体験からほなむけの言葉を贈りたいと思います。

私が学ばせられた社会にスタートするとき、親友の父上のエンジニアより、しみじみ言われたことが今でも昨日のように思い出され、辛い思いをしています。それは、「会社に入ったら専門のことを努力して勉強しなさい。十年たつと一積りついで、勉強した人とそうでないものとは、ものすごく差がくもんだ」ということでした。

職場で自分の専門の仕事が、誰

る今日の機能になっている。この機能のなで一つの価値体系がつけられ、この機能で環境は人工的に生きていく。その結果に対する洞察力はほとんど無視されている。開発のために技術上の決定が要求される時、その決定は科学とテクノロジーの内在的論理で決定されたが、それが自動的に決まるものだからという考え方が、これも全面的に拒否されるべきである。

開発が行われる地域社会には、その開発について選択権があり、当然そこから地域独自の創意と、これに伴う環境が生まれてくるはずである。それは異なる機能要求し、異なる価値体系をもつ。こうした地域の開発結果は、他の地域と同じ価値や同じ効果を生じないし、同じ文化の尺度で計ることもできないのである。人類は同じ地球の異なる根拠をそれぞれ取り持つ荒野とし、人々の心から故郷を抹消しようとする競争があった。こういうことが、平常の開発にも見られる。経済性、便利、生理的快適さと安全、これが環境に要求される。

多様な文化の存在とその歴史の価値の中に、私たちが自身の文化を含めて、諸君の深い理解を期待したい。

## ひとこと

学内にある天満宮の梅がほろびとすやく春らしさを感じるころ、大学が静けさを取りもどすひとときである。やがて梅の花も散つて桜のたよりが聞かれるころ、卒業式となる。年々歳々、同じ光景がキャンパスに展開されるが、卒業生の顔が毎年異なる。と同時に、卒業生を迎える社会情勢もまた然りである。

本学の就職状況は、求人数の増加といえ、早期決定といえ、比較的良好な状態が本年度に見られたが、このような現象が好景の反映であるとは一概にいえぬ。資源の乏しい日本にとって、エネルギーを確保することが必要不可欠であることからして、石油の輸入依存度の上昇は、諸君をこのとこで高懸させ、経済のしくみを恩恵循環させるなど、深刻な問題にまで発展する。新入社員となる卒業生には、このような状況をまともに受けとめて、それぞれの職場で行動していく覚悟が必要。

ところで、卒業生の大半が工業高校から本学へ入学し、四年間の学業を積んで競争社会へと入って行くわけだが、会社人、社会人としての勉強はこれから本番であるところを銘記すべきであろう。大学では自分の選択した専門分野だけに止まらず、現代の多様化された社会では、必要に応じて勉学が求められることは必定である。これらの勉学もまた一朝一夕にしてできるものではなく、地道に努力してこそなされるものである。技能教育から技術教育まで、一貫して工業教育を受けてきた卒業生の能力が発揮されるのも、今後の勉強いかんにかかっている。

過去九回卒業生を出して、今回は区切りのいい十回目である。幸い、企業における本学卒業生の評判は良いと聞く。卒業生の活躍が本学の真価を問うことも事実である。卒業式が終わると間もなく、フレッシュマンでキャンパスがにぎやかになる。かれらもまた、四年後は、卒業生となって社会へ飛び立つことになる。

「改善は永遠にして無限なり」と強調して、ほなむけの言葉を贈ります。

そのときから打ち明けて、親身に相談のつてくれる人が必要です。そういう人がいないと、ノイロトセナリ、ついには身の破滅にもなかねません。

もう一健康が第一であることはいくらもありません。よく若いときに体を鍛えておきましょう。山に海に、スキー、スケートなど楽しみながら鍛錬しておきましょう。



昭和54年度卒業生名簿

(三月二十五日付卒業確定者)

機 械 工 学 科

A 組

B 組

電 気 工 学 科

A 組

B 組

建 築 学 科

A 組

B 組

システム工学科

# 卒業計画テーマ一覧

機械工学科

〔石崎敬三研究室〕

〔天川陽康・村川正夫研究室〕

〔長田重慶研究室〕

〔町山忠弘研究室〕

〔小高寿夫研究室〕

〔池田義雄・小倉 勝研究室〕

〔漆原富士夫研究室〕

〔鈴木 昭研究室〕

〔玉木 保研究室〕

〔横谷真一郎研究室〕

〔柳沢 章研究室〕

〔窪田英毅研究室〕

電気工学科

〔大久保勝弘研究室〕

〔岡本保雄研究室〕

〔神谷六郎研究室〕

〔桑田正信研究室〕

〔高橋琢二研究室〕

〔八田 達研究室〕

〔中道 一郎研究室〕

〔廣瀬治男研究室〕

〔高橋篤夫研究室〕

〔堀田勝喜研究室〕

〔佐伯正盛研究室〕

〔泰野昌親研究室〕

建築学科

〔三苫正光研究室〕

〔宮坂修吉研究室〕

〔塩原正典研究室〕

〔廣川勇一郎研究室〕

〔木村蔵司研究室〕

〔高橋 恒研究室〕

〔難波恒夫研究室〕

〔橋井武一研究室〕

〔渡辺勝彦研究室〕

〔桑原文夫研究室〕

〔波多野 純研究室〕

〔伊藤庸一研究室〕

システム工学科

〔横内龍雄研究室〕

〔齋藤次郎研究室〕

〔櫻田 昇研究室〕

〔杉本安次郎研究室〕

〔本間鶴千代研究室〕

〔吉村 浩研究室〕

〔飯倉道雄研究室〕

〔宮井正弥研究室〕

〔土井 誠研究室〕



# 思い出のキャンパス



体育祭から



クラブ活動



数年後はまた変わるでしょう (54年6月撮影)



試験の時ばかりではなかった…… (図書館内)



恒例の盆踊り大会はいつも盛況でした



52年11月に行われた創立記念式典 (あいさつしている人は吉田 衛前学長)



楽しい「合ハイ」のひとつときでした

# 昭和54年度就職活動順調に終わる

## 小高 寿夫教授

就職は十二月中にはほとんどが内定済みとなりました。学生は積極的に活動したし、本学の全教職員がそれを支援したからです。また、外にあっては父兄の皆さま卒業生の諸君、後援会の皆さまが応援してくれました。

今回の求人募集は極めて、今まで経験しなかった激しさだったとも言えます。ほかの大学では決して法・文・経などの大学では決してこれ程ではなかったようです。

初めての求人申し込みが、全国から多数寄せられました。地元ならびに近県からの求人が従来通りに継続されたことは申すまでもありません。本学の存在を初めて知った、と素直に話してくれた企業もありました。求人が豊富だった企業の姿勢がうかがい知ることができ、そして、こんなに立派なまたたくした学園をどうして今まで知らなかったのだろうか、と自問を繰り返している方もありました。これらの方々はいずれも、隣

りの会社、同業者、同地内情報などで伝え聞いて来たのでした。昨年初夏に配布した、第二組の大学PRパンフレットは第一組と同様に、主として遠隔地出身の学生のために、その地元の求人開拓をねらったものでした。これにはかなりの反響がありました。しかし、大企業が多かったため、実際の就職は(まだ詳細は判明していませんが)難しかったようでした。この辺の就職PRおよび指導はもったいぶりの細かなものが必要である、と反省しています。

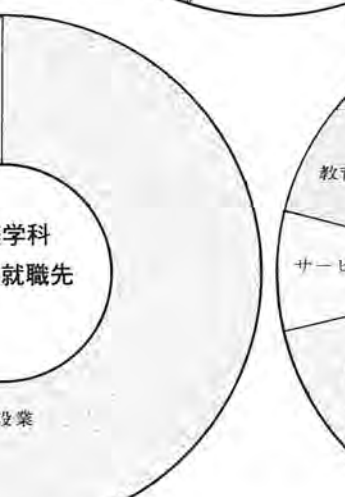
五十七件の求人票が広い提示箇所を埋めつくしました。学生はこの壁面に真剣な目を走らせて、自己の志望との合致点を見出すために努力しました。求人は製造業、建設業、計算センター、設計事務所、流通業、食品業、スポーツ用品設備業、官公庁、地方公務員が多様な職種にわたっていました。本学では、このような

職種が多岐化を予測して、学生はそれらのように対応したらしいが、を指導して来ました。既に六月初めには、「就職の手引き」を例年通り発行しました。それに続いて、「本年の就職には如何なる対応が必要か」を発行して、社会経済の現状、今後の動向、国際情勢、世界経済との関連などに、幅広い視野と理解が持てるようにするべく、試験問題例や面接時の問答などをとりあげてオリエンテーションや映画で指導し、さらに会社説明会の学内開催なども行い、学生の認識と準備を確かなものにするための工夫と努力を重ねました。

五千件以上の求人、これに対し卒業予定者七百名は、本当の成長と社会的信頼を真摯に求めています。求人の取り扱いは正確に受け付け、これも見やすく整理



して、学生に自由に閲覧させました。会社説明会のポスターなども壁面の許す限り要求の通り掲示しました。他方、学生に対しては、推薦状の発行は同時三件(二回にわたって六件)にとどめ、慎重な行動を要求しました。そして、会社側の要望に対しては、できる限



り幅広くお応えする方針とし、採用は一人一社の原則でお願いしたい旨を伝えて、協力を要請しました。こうした結果は申すまでもなく、学生は自己の志望を満足して全員の就職がはやと決ってしましました。

しかし、求人側はわずかにその七分の一が要求を満たすにすぎない結果となりました。これは致し方ない事情として了解願わねばならないのですが、大学としてはやはり申し訳のない気持ちでいばいで、本年度のような就職状態が来年度も起るかどうかが至く手前



はてませんが、今回のようでは求人側が不満であることは明瞭です。そこで改訂案としては、求人側に学生の日常の研究活動と結びつづRの方法を探ってもらおう。たとえば、工場見学、製品カタログや会社情報あるいは製品実物など



どを大学の資料室に展示し、そして、質問に答えるなど、年間を通じてのPRをしてもうかがうことが考えられます。そうすれば求人側も手をついた結果が得られますから納得できるのではないのでしょうか。

## 研究室では④

### 情報数理工学

専門は何ですか、と聞かれれば、情報数理工学です、と答えることになっている。情報+数理工学というところから、その中にはいろいろな分野があるけれど、電子計算機を利用して、工学の対称となる現象を数理的に解き明かすという考え方もあろう。何年か前までは、研究者の書籍として定義されていなかった分野であったから、これが専門でというのに、とまどいを覚えたのである。電子計算機の発達と共に段々世の中に知られて来るにつれ、声も調子も高まって来るのだから、人間代と共に脚光を浴び、今や花形

となった生物物理学の専攻者も生物学、物理学の人々から理解されず、自身の狭い思いをした経験があるのではないだろうか。さて、数理的にというのは、数学的にと言っても良いが、数学の中でも特に確率・統計を中心に置いて解析しようと考えている。確率の考え方でやっかいなのは、実際に生起し得る現象を表現しないことがあることである。例えば、硬貨投げをするとき、表の出る確率は1/2、裏の出る確率は1/2、その他は0である。こうすれば理論的には問題ない。しかし、実際には硬貨はふちで立つことだってあり得るのである。つまり確率

0というのは必ずしも生起しないということではない。もう一つやっかいに思っているのは、現実には連続なのに、離散モデルしか構成出来ない場合があることである。例えば時間は連続なのに、数学的モデルでは離散時間としてしまうことがある。連続の世界と離散モデルのずれがどの程度か評価がやっかいである。

上に述べた事柄にいつも悩まされているわけだが、学生との問答で、ふと良いヒントをつかむことがある。そんな時は、やはり大学というのには研究と教育の場なのだを感じる。研究と教育は、はっきりと切り離すことは出来ないであろう。個人的体験としては、それは大いに言えることで、学生時代の強烈な印象として残っていることである。ある助教のセミナーの折

ある問題(偏微分方程式の問題)を、あてられた学生が、これはルベーグの収束定理を使えば、行で証明できる、と答えた。するとその助教は、はっとして立ち上がり、しばしば黒板の前で考え、深くうなずき、うかも知れませんが、とつぶやいた。しばらくしてその解き方をヒントに彼は斬新な論文を書き上げたのだ。

理想的な研究環境として、十分過ぎる研究費があり、(難)かな賃賃をもち、(互)いに触れ合える仲間がいて、(四)緊密感のある教育の場に接していること、が挙げられよう。

(一)の条件は(二)より優先順位が高いと思う。極端に言ってしまうと、(三)が満たされていなければ、(四)の情報数理工学に凝ったことである。(土井誠システム工学科講師)

に作用しようかと感じている。直接的な研究のヒントでなくとも間接的なヒントは得られようである。そして、大学には、四の条件が大事で、これがあれば、(一)をある程度補うのはなからうか。

若羽黒という相撲とりがいて、あんな型の押し相撲で、大関にまでなったそう。彼は引退の折、趣味は何かと聞かれ、ひところ相撲に凝ったことがある、と云ったそう。

## 平野智治先生 逝去

本学第二学部長平野智治氏が、昨年十一月一日午後四時ごろ、脳血管のため、杉並区上荻一丁目一五二の自宅で逝去されました。享年八十二歳。

ここに謹んでご冥福をお祈り申しあげます。

〔同氏の略歴〕 大正十四年、東



名譽教授の称号が与えられたありし日の平野智治先生

## 吉田前学長ら7氏退職

吉田前学長、米田桂三教授、平林重次郎教授、市川直晴教授、秋山玉太郎教授、電気工学科技術職員、中島清一電気工学科技術職員、総務部庶務課長野野ノ看護婦の七氏が今月三十一日付で停年退職となりました。

吉田 前学長  
米田桂三 教授(数学)  
平林重次郎 教授(数学)  
市川直晴 教授(体育)



〔吉田 前学長〕 昭和七年、東京工業大学機械工学科卒業後、中島飛行機株式会社に入社。同社生産部長、三島工場長を経て、二十一年に千葉工業大学教授となる。以後、山梨大学教授、東京都立工業奨励館館長を経て、本学開学時の四十二年四月、機械工学科主任教授に就任。学長事務代理、システム工学科主任教授、学校法人東工学園理事などの学内の要職を歴任。五十二年四月に第四学長に選出。同氏は本学の設立準備委員会の委員として、開学以前から活躍され、本学の最大功労者の一人である。また、学外においても、特に中小企業等の近代化や振興に多くの功績を残された。四十一年に勲章を授けられた。

〔米田桂三氏略歴〕 昭和七年、京都帝国大学理学部卒業。以後、一貫して教育畑を歩まれ、二十六年から四十四年まで横浜市立大学で教授をこられ、同大学文理学部長の要職にあつた。五十年四月本学教授に就任して就任。教養科主任教授も務められた。

市川直晴 教授(体育)

〔平林重次郎教授〕 昭和十四年、東京物理学専攻科(数学)卒業。気象大学校教授を経て、四十五年四月本学教授に就任して就任。同年十月教授に昇格、教養科主任教授として活躍された。

秋山玉太郎 教授(電気)



〔市川直晴氏略歴〕 昭和六年、日本体育専門学校卒業。教育界で活躍され、都立国語館高等学校教諭を経て、四十四年四月本学体育科助教授に就任。四十五年十月教授に昇格。日本陸上競技連盟理事、第一種公認審判員、東京五輪主任審判員、運営委員、メキシコ五輪強化委員などを歴任された。



〔中島清一 技術職員(電気)〕



〔今野モトノ看護婦(庶務課)〕

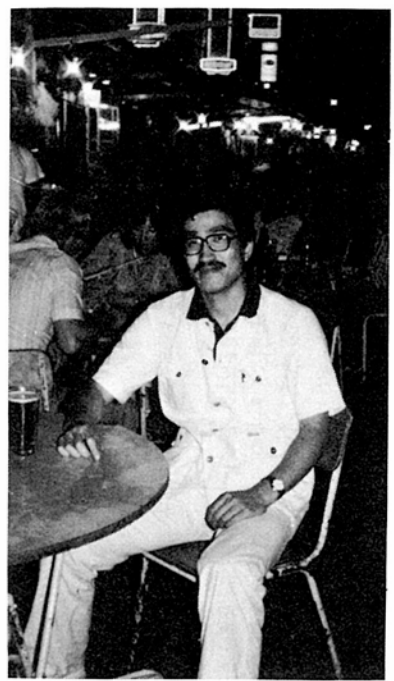


〔中島清一 技術職員(電気)〕

# 「国際土質学会アジア会議」に出席して

建築学科助教授 桑原 文夫

# 海外研修レポート



シンガポールのチャイナタウンにて

国際土質学会のアジア地域会議は四年に一度、国際会議の中間年に開かれることになっていく。今回は六回目でシンガポール（東南アジア土質学会主催）において一九七九年七月二十四日から二十八日まで開催された。

BULLETIN No. 1が私の手元に届いたのが一九七八年始めだったと思う。千葉県浦安町における地盤沈下の問題について、東工大の吉見吉昭教授、コンサルティングエンジニアの橋本友則氏と私の三共著の論文を提出した。現場は神奈川県の厚さが急激に変化している所で、そのために最終的には相対的な不平等沈下が予想された。そこで隙間水圧計と圧密解析によって現場観測を続け、圧密解析によって実測沈下量を説明するともに将来の沈下を予測したのである。一九七八年十月に論文を送り、一九七九年一月に審査結果とBULLETIN No. 3を受け取って会議への準備は整った。

会場はシンガポール郊外の丘の上にあるシンガポールホテルであった。シンガポールで最も高級なホテルであろうであるが、私はその隣のホテルに泊ることにした。会議への参加者は約五百名で、国内の発表者も小規模である。四つの技術部会に別々としてウェルデンのフロムス教授による招待講演および一つの一般講演・見学旅行が盛り込まれていた。論文の数、四部会あわせて八十五編で、そのうち、日本が二十六編、インドが二十四編、東南アジア（台湾・香港・マレーシア・シンガポール・タイ）が十九編、その他のアジア諸国が六編、アジア以外の国から十編であった。

初日は開会式に続いてフロムス教授の「軟弱粘土上の建設における問題点と解決」と題する特別講演が行われた。日本においてもすでに使用されている工法の紹介は目新しいものではなかった。

講演の後、無料のランチョンが出るので期待しないで食堂に行くと、中国料理のフルコースが出され感激した。以後、会議期間中西洋料理と中国料理が交互に出されるので、屋近くなると最大の関心事は屋敷のメニューのこととなる。しかし次第に奇妙なことに気が付いた。それは肉の類で、牛肉も豚肉も一切出てこない。宗教上の理由でこれらのもは口に出来ない参加者が多いのだという。出される肉はチキンか魚であり、終には出ずるものに事欠いてか、カエルまで出てきたには閉口した。

二日目は我が論文を提出した第二部会「軟弱粘土の問題」土質技術と安定処理が開かれ、二編の論文が寄せられていた。議長はシンガポールのDr.タン、一般報告はタイのA.T教授、赤木俊一博士が行なった。赤木教授の一般報告は圧密試験法の問題点を指摘した後、バーチャルドレンの施工法として排除型の有効性を強調した。その後の討論やパネルディスカッションによる報告もサンドレインに関するものに話題が集中し自然地盤の圧密や現場計測に関するものには時間の割当てが少なく残念であった。

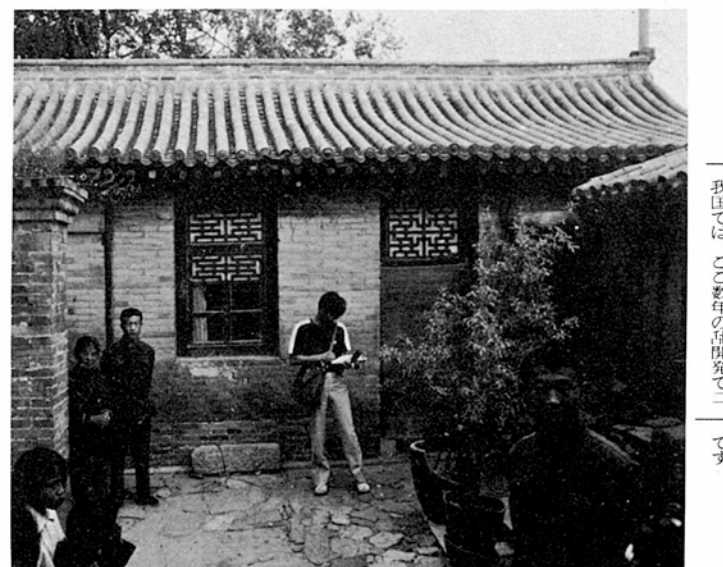
アジア会議においては発表論文数は日本とインドが圧倒的に多いので、登壇者も必然的に両国が多くなる。困ったことはインド人がマイクを握ると何を言っているのか全く理解出来なくなることである。彼らはほとんどインドなまりの英語で話すが、中国料理のフルコースが出されるので、屋敷のメニューのことに気が付いた。それは肉の類で、牛肉も豚肉も一切出てこない。宗教上の理由でこれらのもは口に出来ない参加者が多いのだという。出される肉はチキンか魚であり、終には出ずるものに事欠いてか、カエルまで出てきたには閉口した。

# 中国の農村を視察して

建築学科助手 岩隈 利輝



いたるところで高層建築が…北京市内の都市住宅



解放前のふるい民家の調査から

昨年八月の末から九月にかけて中国の農村を訪ねる機会を得た。限りなく広域化する近代社会で、その生活空間を模索している私にとって絶好の機会であった。わずかに一週間という短期間で広大な中国農村の全貌を把握できると思っていたわけではない。しかし中国からあつて初十四名だった団員が、七名に結果的に小回りが利いたこと、話し合いが良くできたこと、そして何よりも中国建築学会の誠意ある滞在期間中の行程編成によって、北部から南部にわたって幅広く見聞できたことは幸いであつた。

私は農村建築技術交流団は東北大学の佐々木嘉彦教授を団長とする総勢七名で、通訳として北京外語大学の孟先生と中国建築学会の書記官の唐さんが同行してくれた。北京・大連・太原・鄭州・上海と、都市を中心に小さな田舎を描いて移動しながら農村の七つの人民公社を見学した。人民公社を中心とする中国農村の紹介は別に報告書を書きたくないので、ここでは印象を書くことにします。

八月二十九日成田空港を四時過ぎに離陸し、私たちが北京空港に着いたのは真夜中の一時過ぎであった。にもかかわらず中国建築学会の人事課の数名が暖かく出迎えてくれた。空港から市内に続く道は焦点の定まらないナトリウムランプの黄色の光が深々と夜を照らす。黒い影を落したマイクローバは無灯火でひた走り、ホテルへ向かっていた。いかに夜中とはいえ国際空港からその首都に向かう道路である。三台のトラックと、遠方まで帰るらしい自転車の影と、荷物を積んだ耕耘機がけたままエンジン音を響かした夜道に驚かされた。四時過ぎの朝の光が差し込む。四時過ぎの朝の光が差し込む。四時過ぎの朝の光が差し込む。

厚意がわれわれ一行のハードな一周間の移動を支えてくれた。黄河を語りながら中国を語ることはできないが、自然を再認識するのには、これほどはつきりと経験できるものは他にないと思えた。北京を含め黄河の北はその土の質の悪さに驚いた。雨季とか乾季と

「自然のまきし」と「緑の豊かさ」は大連に来てすぐに解き明かされた。大連人民公社を日々訪れる人びとに大連の歴史と経験を伝える立派な展示館があつて、木も生えない山岳地帯の荒地が豊かな農地に生まれかわる様子を大連生産大隊副隊長の賈東衛氏が記録映画で説明してくれた。山西省は雨量が少ないといつても毎年約二百ミリに達する。大地が丸裸になつたといつても日本の風土から想像することは困難という他ない。かつての日本での水害の経験を思い浮かべ、我が国の植林の歴史の重みを感じるをえなかった。我が国では、ここ数年の乱開発で二

十パーセントの農地を失つたといふ。都市の地表はアスファルトで覆われ、下水の排水能力を少しも超えると、あちこちで水があふれる現状を思い浮かべ、ゾッとした。しかし、このようにすぐれた農業大連経験が、見直し論、「近代化へ急速に転換している」と報道されている。中岡哲郎は「大連は十七世紀から十九世紀も二十世紀も同時に共存している」といっている。たしかに技術や機械は（表現在）適切かどうか疑問だが、遅れている。しかし、社会のさまざまな要因が不可分に組合わり、独自の自然系をなしている。これが底知れない感動を生むのだらう。大連経験を記して、中国の「近代化」が欧米諸国や我が国と同じ道を歩むとは思えない、新しい道を切り開く事を私は期待している。

私たちは宿泊地である都市ではひたすら真町を練り歩き、深く反省することもなくのぞきこみ、無断撮影をくり返した。これに対し中国の同行者達は寛大であつた。「中国をくわらうとする努力が日中友好の基礎です」と。